

特集：文化としてのゴミ

序

藤木秀朗

なぜ文化としてのゴミなのか。そもそもゴミは文化なのか。本特集のテーマに対して、こうした疑問が出てくるのは当然だろう。ゴミは、実際、工学的・化学的に処理され、法律によって規制され、経済的な原理として機能している。したがって、ゴミ問題は自然科学、法学、経済学、社会学の分野に任せておけば十分であり、文化として考えることにどのような利点があるのかと疑念を抱かれても不思議ではない。しかし、本特集では、そうした他分野の研究とともに、ゴミを文化として考えることが、それがもたらす環境問題に対処する上で一つの大きな決め手だと考えている。それは、ゴミが、日常生活から芸術・メディア活動に至るまで人間のあらゆる種類の営みと切り離せないものだからであり、人々はそうした営みを通して身体的、想像的、慣習的、倫理的、あるいは創造的にさまざまな形でゴミと付き合っているからである(Hawkins 2006)。したがって、本特集の大きなねらいは、そうした多様な文化的実践を通じて——とくにメディアを通じて——人々はゴミとどう付き合ってきたのか、どう付き合うべきかを考察するところにある。

このことを探究するためには、まず、文化とゴミがこれまでにどのように論じられてきたかを確認しておく必要があるだろう。近年のポストヒューマニズムやニュー・マテリアリズムの議論の中で頻りに指摘されているように、従来の「文化」や「culture」の概念は、歴史的・地理的文脈に応じて多様で複雑な意味を帯び変化してきたとはいえ、人間中心に考えられてきたところが大きい。ゴミに関する古典的書物としてしばしば引き合いに出されるメアリー・ダグラスの『汚穢と禁忌』はその典型だと言える。彼女にとって、ゴミないしは汚穢(dirt)は文化秩序の創出と維持のための「副産物」(ダグラス 2009, 360)である。そこで想定されているのは、ウィリアム・ヴァインニが指摘するように、あくまで人間にとってのゴミ排出の意味であって、物質としてのゴミ自体ではない(Viney 2014, 1-2)。文化が人間中心に考えられると、物自体の問題が看過されてしまうのだ。

事実、ゴミは、人間によって産出され意味付けられた側面と物自体の側面の両面からなる。藤原辰史によれば、ゴミとは「ものの名前ではなく、ある特定の社会経済状況のなかでの最終形態をあらわす言葉にすぎない。新品がゴミという名称に変わるにすぎない。」(2019, 17-18)藤原はこのように述べながら、木材や生ゴミなど自然環境で分解されるゴミに焦点を合わせて論を展開している。ヴァインニは、これとは幾分異なる観点から、しかし同様

に、ゴミとは時間の問題だと主張している。すなわち、それは、時間の経過の中で、ある事物がある時点からそのように感じられるものだというわけなのだ (Viney 2014, esp. 2)。二人の論者は、その違いにもかかわらずいずれも、ゴミがなお人間と切り離せないものであることを示唆しつつ、ゴミ自体の性質に注意を向けている点で一致している。

このようにゴミの両面性を踏まえて文化を考えるのであれば、ブルーノ・ラトゥールやジェーン・ベネットなどが示唆するように、文化における人間の位置を相対化し、文化自体の概念を人間中心的なものから、物——その性質とその作用力 (agency)——を含めた概念として再定義する必要があるだろう (ラトゥール 2008; Bennett 2010)。これが、「文化」と「自然」を二元論的に見る見方とは大きく異なっていることは言うまでもない。ゴミを人間と物の関係性として捉える見方はまた、人間と地球全体との関係の捉え方にも呼応している点でも重要だ。人新世と呼ばれる時代にあつて、地球もまた、地質としても生態系としても人間の影響力から切り離せないものであると同時に、人間には還元できない物質としての特性も備えている。ゴミに対してにせよ地球に対してにせよ、とりわけ近代以降は、人間がそれを支配し、自らに従属させる道具的關係 (Bennett 2010, xi) が慣習化してきた。すなわち、ゴミは、そうした慣習の中で、ある物が人間の道具としての価値を失った結果として創出されてきたものなのだ。地球環境の劣化が喫緊の課題になっている今、文化におけるそうした物との付き合い方を見直し、より良い関係のあり方を見出していくことが環境問題の解決に向けて必要不可欠だと考えられるのである。

ゴミを文化として考えることにはさまざまな論点がありうるが、ここでは本特集の5本の論考にかかわり、近年盛んに議論されているものを4つだけ挙げておきたい。1つは、近代の資本主義システムとそこにまつわる慣習に対する批判である。資本主義システムは、自然環境の中で「分解」されない化学物質や放射性物質といった毒性を伴うゴミを生み出してきた。しかも、それが人間にも人間ならざるものにも悪影響を与えるものであるにもかかわらず、このシステムの中で人々は生産的価値・道具的価値を優先させ、そのシステムの維持のためにゴミを排出すると同時に (Giles 2016, 82)、その人間中心の価値を失ったものには目を向けず、想像の外に排除してきた。このことにも関連して2つ目の論点は、ゴミが人間社会の不均衡性と連動してきたことへの批判である。歴史的にゴミ処理は下層の人たちが担ってきたことや (パウマン 2007)、先進国のプラスチックゴミなどの廃棄物がグローバル・サウスの地域に運ばれて処理されていることはよく知られている (例えば、同前; Dönmez 2016)。こうした事実はまた、ゴミそのものと同様に、自然化され、それゆえに不可視化されてきた。第3に、そうしたゴミやゴミに従事す

る人たちの立場から社会の規範を問い直す論点も生まれてきている。このクィアの論調は、ゴミにつきまとう汚染、不純さ、混濁さ、過剰さ、流動性、周縁といった性格に価値を置き、それを排除して純粋さと権威を保とうとしてきた資本主義、植民地主義、白人中心主義、欧米中心主義、異性愛中心主義といった、世界に支配的な規範を攪乱し、社会のあり方自体を問題化する (Kendall 2021; Mayer 2013)。そして最後に、これら3つの論点とも関連して第4の論点として指摘したいのがメディアの問題である。メディアは、ゴミをどう可視化し、人間とゴミとの関係を見直し、人々の想像力や倫理感に訴えるのか。続く5つの論考は、これら4つの論点を大なり小なり踏襲し、とりわけメディアの問題に取り組んでいるという点で共通している。

本特集は、2020年1月25–26日に開催したTCS国際シンポジウム「文化としてのゴミ」がベースになっている。本特集ではメディアに焦点を合わせたのが、当シンポジウムで発表したネイスン・ホブソン、英子・丸子・シナワ、土屋雄一郎、猪瀬浩平の各氏をはじめ多くの参加者から数々の有益な示唆をいただいた。この場を借りて謝意を表すとともに、本特集をきっかけに、ゴミという、あらゆる分野の鋭意を結集することなしには解決され得ない問題に対して学際的な研究がさらに盛り上がることを願ってやまない。

参考文献

- Bennett, Jane (2010) *Vibrant Matter: A Political Ecology of Things*. Durham: Duke University Press.
- ハウマン、ジグムント (2007) 『廃棄された生——モダニティとその追放者』中島道男訳、昭和堂 (原初初版2004)
- Dönmez, Başak Ağin (2016), “Ecological Imperialism in the Age of the Posthuman: David Fedele’s E-Wasteland.” In *Ecodocumentaries*, edited by Rayson K. Alex and S. Susan Deborah, 75–94. London: Palgrave Macmillan.
- ダグラス、メアリ (2009) 『汚穢と禁忌』ちくま学芸文庫 (原書初版1966)
- 藤原辰史 (2019) 『分解の哲学——腐敗と発酵をめぐる思考』青土社
- Giles, David Boarder. (2016) “The Work of Waste-Making: Biopolitical Labour and the Myth of the Global City.” In *Environmental Change and the World’s Futures: Ecologies, Ontologies and Mythologies*, edited by Jonathan Paul Marshall and Linda H. Connor, 81–95. London and New York: Routledge.
- Hawkins, Gay (2006) *The Ethics of Waste: How We Relate to Rubbish*. Lanham, MD: Rowman and Littlefield.
- Kendall, Tina (2012) “Cinematic Affect and the Ethics of Waste.” *New Cinemas: Journal of Contemporary Film* 10 no. 1: 45–61
- ラトゥール、ブルーノ (2008) 『虚構の「近代」——科学人類学は警告する』川村久美子訳、新評論 (原書初版1993)
- Mayer, Sophie (2013) “Dirty Pictures: Framing Pollution and Desire in ‘new New Queer Cinema.’” *Screening Nature: Cinema beyond the Human*, edited by Anat Pick and Guinevere Narraway, 145–176. New York and Oxford: Berghahn.
- Viney, William (2014) *Waste: A Philosophy of Things*. London: Bloomsbury.